
守り人

ぱるひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守り人

【NZコード】

N8244A

【作者名】

ぱるひこ

【あらすじ】

マルキス国の人、マルキス・レイアとその世話役の老人、ラクト・モーザ。二人が旅の途中、正体不明の敵の襲撃に遭ってしまう。絶体絶命のピンチを救い出した謎の旅人アグニ。その力を認めたモーザはアグニに用心棒を頼む事にした。そこから危険な旅が始まるのだった！！

第一話・救いの矢

荒野を一台の馬車が駆けていた。中には気品溢れる少女と威厳のある老人が乗っていた。

「姫君、申し訳ありません」

老人が深々と少女に頭を下げた。

少女はマルキス国国王、マルキス・オクートの次女、マルキス・レイア姫。老人の方は姫の世話役、ラクト・モーザ。

「良いのですモーザ。私一人が犠牲になるだけで国が救われるのですから」

「コリ」と笑つたが、その目には悲しみの色が見えた。

「モーザ様。もうすぐ国境です」

馬車を走らせている従者が声を掛けってきた。

「そうか。越えたら少し休もう」

はいと短い返事が返ってきた。

それからしばらく走ると、突然従者が叫んだ。

「姫様！モーザ様！」

何事かと思い外を覗こうとするが、馬車が突然横転した。

ガタガタ！

レイアをかばうひまも無かつた。

「姫！大丈夫ですか！」

すぐに起き上がり辺りを見回した。横でレイアがぐつたりと倒れているのを見つけた。

「姫！」

どうやら頭を打つて氣絶しただけのようだ。

「良かつた・・・」

しかしホツとしたのも束の間、バツと幕が開けられると、武装した兵士が数人、姿を表した。

「マルキス・レイア姫と、その世話人のラクト・モーザだな」

「だつたらどうだといふのだ！」

凄んでみたが、武装した兵士相手にじりする事もできない。無言でレイアと共に馬車の外に引きずり出された。

「やめろーやめないか！」

モーザがレイアに覆い被さるようにした。

「貴様らにはここで死んでもらつ」

そう言つと剣を高く振りかざした。

死んだ。

と思い田をつぶつたが、何時までも剣が振り降ろされない。恐る恐る田を開くと、兵士が苦悶の表情を浮かべていた。背中には矢が刺さつている。

「ジジイと嬢ちゃんを殺すにしちゃ、随分大袈裟だな」

兵士達の後ろの方に弓を構えた男が立っているのが見えた。

「なんだ貴様！」

兵士達がそつちを向いた。

「ただの旅人だよ」

クツクツクツと小馬鹿にした笑いをしながら言つた。

「殺せ！！」

顔を真っ赤にしながら指揮官らしき男が叫んだ。兵士六人が武器を片手に突っ込んで行く。

それを見た男はゆっくりとした動作で弓に矢をつがえた。

ヒュッと風を切る音と共に矢が飛んでいき、一人の喉元にグチュと刺さつた。

男は段々と近付いて来る兵士達に焦りもせずに、またゆっくりと矢を放つた。

今度は顔の中心にカツツと刺さつた。

さすがに弓を使う距離では無くなると、腰に差していた剣をサツと抜いた。

そして、正面から突いてきた槍を避けると、その兵士を真つ一つに割つた。

そのまま体を回転させると、左で剣を構えていた兵士の腹を横に切った。流れるような剣捌きに怯んだのか、残りの兵士の動きが一瞬止まった。

その隙を逃すはずも無く、一気に距離を詰めると残った一人を切りふせた。

その時の顔は子供のような笑顔だった。

「う、動くな！くそつ、この化け物が」
指揮官がレイアに剣を突き付けた。

「剣を捨てろ！じゃないとこいつらを殺す！」

顔が青ざめている。

「殺すって・・・元々殺す気だつたろうが。まあいいや」
クツクツと笑いながら剣を投げ捨てた。指揮官はそれを見て安心したのか、突き付けていた剣を少し下にずらした。

その時、男がニヤッと笑つたような気がした。

「うわーー！」

叫び声が聞こえたかと思つと、指揮官の後ろから誰かが飛び掛かつていった。

よく見ると血塗れになつた従者だ。

「くつ！貴様！」

振りほどくと、従者の胸に剣を突き立てた。

『ぐつ！』

従者と指揮官の声が重なつた。

何事かと思ったが、すぐに理解できた。

いつの間にか指揮官の背中に矢が突き刺さつていた。

「油断するからだ」

男が一つの間にか弓を構えていた。

「ジジイ達大丈夫か？」

剣を拾いながら尋ねてきた。

「かたじけない。お陰で助かつた。そなたは？」

「アグニ。そっちの嬢ちゃんは大丈夫か？」

「少し頭を打つてしまったようだ。心配ない
まだ目を覚まさない。」

「！」の少し先に町がある。そこまで連れて行つてやるわ」

そう言うと後ろに向かって何か叫んだ。

すると、何処に隠れていたのか一台の馬車がこちらに走つて來た。

「貴族を乗せるような物じやないが我慢してくれ」

アグニが恥ずかしそうに笑つた。馬車は子供が走らせていくようだ。

「さあどうぞ」

アグニに促され、モーザがレイアを背負つて乗ると、すぐに出発した。

第一話・頼む！

「あんた達の名前は？」

「申し遅れた。私はモーザ。こちらは私の主人の娘のレイア様です」

「レイア？何処かで聞いたような・・・」

「それより、アグニ殿はマルキスの生まれですかな？」

「まずいと思い、モーザが話題を切り換えてきた。

「いや、オクドールだ。今は世界中を旅している」

「ほう、それは大変ですね」

「ははっ。あんた達程じゃないよ」

談笑していると、外から声が聞こえてきた。

「もう着きますよ

さつきの子供だ。

「彼は？」

「んつ？ああ、あいつはツキメ。色々あつて一緒に旅してる。それに彼じやなくて彼女ね」

そんな雑談をしていると馬車が止まつた。

「ツキメ。矢と食料買つて積んどけ」

指示をすると、はい。と返事し、町の中に消えていった。

「さて、宿を探すか

「かたじけない」

「いいつて

そつとアグニがレイアを背負つて歩いて行つた。

宿はすぐに見つかつたが、何処も満室になつていた。

「一室だけ空いてますが、とても貴族の方をお泊めするよつた部屋

じゃ

「いい。少し休むだけだ」

やつと五つ目の宿で見つかった。

「それでしたらご案内致します」

案内され部屋に入ると、確かに貴族が耐えられるような部屋では無かつた。一応掃除はされているようだが、汚い。さうわい、シーツはきれいだったお陰で、取りあえずレイアをベッドに寝かせる事はできた。

「さて、さつきの説明をしてもらおうか？」

イスに座ると早速アグニが聞いてきた。

「すまないがこちらにも事情がある。聞かんてくれないか」

「・・・ま、良いけど」

沈黙が流れた。

「アグニ殿、頼む。我々を首都のタイロまで連れて行ってくれないか？」

突然モーザが頭を下げた。

「・・・さつきは殺されそうだったから助けたが、用心棒はやつてない」

冷たい言い方だった。

「頼む！何としてでも行かないといけないのだ」

モーザが床に頭をつけて頼んできた。

「・・・うつ・・・うん」

その時、レイアが目覚めた。

「おお、起きられましたか」

モーザが立ち上がり駆け寄った。

「モーザ。・・・貴方は？」

レイアがアグニに気付き尋ねてきた。

「こちらの方は先程助けて下さった方でござります」

モーザがさつきの事を簡単にレイアに説明した。

「そうでしたか。ありがとうございました」

説明を聞き終わると、レイアがアグニに向かって深々と頭を下げた。

「勿体ない。貴族が平民に簡単に頭を下げるべきじゃない」

アグニが諭した。

「いえ、命の恩人に貴族も平民もありません」

「なかなかしつかりしている。流石マルキス国の中様だ」

「知っていたのか！？」

モーザが驚いた表情を見せた。

「まあ一応ね」

「知っているのなら尚更頼む！タイロまで守ってくれぬか

「私からもお頼み申し上げます」

モーザとレイアが頭を下げる。

「うーん。姫様の頼みを断るわけにもいかないか。ただし、それなりの礼は払つて貰うぞ」

二人共その言葉に嬉しそうな顔をした。

「かたじけない」

「それと、旅の最中は俺の言う事を聞いてもらう。いいな？」

「わかつています」

レイアが答えた。

「それじゃさつさと出発するぞ」

アグニがさつさと部屋から出て行こうとした。

「もう行くのか？」

モーザが戸惑つたような表情を見せた。

「当たり前だ。奴等の仲間がいるかもしれないだろ。捕まりたいのか」

厳しい言い方だが、アグニが正しかった。既に町には不穏な影がうごめいていた。

フードの付いた白いマントに身を包んだ三人組が、アグニの馬車を囲みながら話をしていた。

「ここにいるはずだ。探し。姫以外に用は無い。殺せ」

中心の男が指示すると、他の二人が散つていった。

アグニ達三人は平民の格好をして、町中を隠れるようにしながら歩いていた。貴族の格好だと町中では目立つてしまつ。

「……」

レイアにとつては見聞きする物すべてが新鮮なようで、辺りをキヨロキヨ口見回しながら歩いている。

「レイア。あまりキヨロキヨ口するな。目立つぞ」

アグニに注意されると、レイアが恥ずかしそうに首をすぼめた。

「アグニ殿！姫を呼び捨てにするとは…」

モーザが顔を真っ赤にした。

「ジジイ、さつきも言つただろ。俺とレイアは兄弟で、ジジイの孫つて事にするつて」

アグニが面倒臭そうに説明した。

「だが！」

「別に良いんだぜ？従えないなら」

少し脅してみた。モーザが黙つてしまつた。

「おじいさま。良いじゃないですか」

レイアが仲介した。この状況を楽しんでいるようだつた。

「・・・わかりました。私もできるだけ努めます・・・」

モーザを納得させると、アグニは満足そうに笑つた。

その時、後ろからゾクツとするほど殺氣をはらんだ視線を感じつた。この中でそれに気付けたのはアグニだけだ。

「・・・」

「お兄様。どうかしましたか？」

突然表情を変え、黙り込んだアグニをレイアが心配そうに覗き込んだ。

「・・・恐らく追つ手に見つかつた」

『えつ…?』

いきなり言われた二人は大きな声を出してしまった。

「騒ぐな」

そんなレイアとモーザをアグニが諫めた。

「ジジイ、すぐに馬車に戻れ。ツキメがいるはずだ。そのまま少し離れた所に逃げる」

「アグニは？」

「追つ手を何とかする。早く行け」

そう言つうと剣の柄に軽く手を掛けた。

「・・・」

レイアがアグニを心配そうな目で見てくる。

「レイア、大丈夫だ。早く行け」

その視線に気付いたアグニが優しく言つた。

「・・・御無事で」

そう言い残すと、モーザと共に走り去つて行った。

それを見送つたアグニは後に後ろを振り向き、ダッシュと突っ込んでいった。そのままシャツと剣を抜くと、白衣マントを着た奴に切りかかつた。

ガチイツーン！

金属同士がぶつかりあう音が辺りに響き渡る。

『うわーー！』

『きやあーー！』

切り合いに気付いた周りの人達が、叫び声をあげながら散つていった。

不意打ちを防がれたアグニは後ろに数歩下がり間合いを取つた。それを見ると、白衣マントが剣を構え、ジリツ、ジリツと間合いを詰めてくる。

しばらく睨み合いが続いた。そして、しばらくそれが続くと、まるで合わせたかのように二人が同時に地を蹴つた。

ちょうど真ん中ぐらいの位置で一人が同時に地を蹴つた。パキッという金属の折れるような音が後ろから聞こえてきた。

「ふ〜」

息を大きく吐きながらアグニが振り向くと、白マントの剣が折れ、地面に突き刺さっていた。

「クツクツクツ」「

突然白マントが肩を震わせ笑いだした。

「何がおかしい」「

アグニが怪訝な表情をした。

「私の任務はお前を引きつける事。既に任務は完了している」「まさか・・・」

嫌な予感がした。

アグニは白マントを無視し、横を弾けるように走り抜けた。

「逃がさん！」

白マントがそう叫ぶと、先の折れた剣をアグニの背中に掛けた。杯投げ付けた。

「くつ！」

間一髪でそれを躱したが、白マントはその間に一気にアグニとの距離を詰めてきた。そして、そのままアグニのみぞおちに拳を叩き込むと、上に飛び上がり、顔面に蹴りを仕掛けてきた。

アグニは屈んで蹴りを躱すと、剣をパッと放し、白マントの脇腹を思い切り殴りつけた。

「カハツ！」

空気の漏れる音をだしながら、小柄な体が横に吹っ飛んでいく。

「クソツ・・・」「

アグニはそれに田もくれず、馬車に向かつて走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8244a/>

守り人

2011年1月8日22時21分発行